日蓮大聖人御書全集

同生同名御書

どうしょうどうみょうごしょ

新版
1518
～
1519

同生同名御書

文永9年('72)4月　51歳　日眼女

大闇をば日輪やぶる。女人の心は大闇のごとし、法華経は日輪のごとし。幼子は母をしらず、母は幼子をわすれず。釈迦仏は母のごとし、女人は幼子のごとし。二人たがいに思えば、すべてはなれず。一人は思えども一人思わざれば、あるときはあい、あるときはあわず。仏はおもうもののごとし。女人はおもわざるもののごとし。我ら仏をおもわば、いかでか釈迦仏見え給わざるべき。

石を珠といえども珠とならず、珠を石といえども石とならず。権経の当世の念仏等は石のごとし。念仏は法華経ぞと申すとも、法華経等にあらず。また、法華経をそしるとも、珠の石とならざるがごとし。

昔、唐国に徽宗皇帝と申せし悪王あり。道士と申すものにすかされて、仏像・経巻をうしない、僧尼を皆還俗せしめしに、一人として還俗せざるものなかりき。その中に法道三蔵と申せし人こそ、勅宣をおそれずして、面にかなやきをやかれて、江南と申せし処へ流されて候いしか。今の世

の禅宗と申す道士の法門のようなる悪法を御信用ある世に生まれて、日蓮が大難に値うことは、法道に似たり。

おのおの、わずかの御身と生まれて、鎌倉にいながら、人目をもはばからず、命をもおしまず、法華経を御信用あること、ただ事ともおぼえず。ただおしはかるに、濁水に玉を入れぬれば水のすむがごとし。しらざることをよき人におしえられてそのままに信用せば、道理にきこゆるがごとし。釈迦仏・普賢菩薩・薬王菩薩・宿王華菩薩等の各々の御心中に入り給えるか。法華経の文に「閻浮提にこの経を

信ぜん人は、普賢菩薩の御力なり」と申す、これなるべし。

女人はたとえば藤のごとし。おとこは松のごとし。須臾もはなれぬれば立ちあがることなし。はかばかしき下人もなきに、かかる乱れたる世にこのとのをつかわされたる心ざし、大地よりもあつし。地神定めてしりぬらん。虚空よりもたかし。梵天・帝釈もしらせ給いぬらん。

人の身には、同生・同名と申す二りのつかいを、天生まるる時よりつけさせ給いて、影の身にしたがうがごとく、須臾もはなれず、大罪・小罪、大功徳・小功徳、すこしも

落
おとさず、かわるがわる天にのぼって申し候と仏説き給う。このこと、はや天もしろしめしぬらん。たのもしし、たのもしし。

四月　日　　日蓮　花押

四条金吾殿女房御返事

この御文は、藤四郎殿の女房と常によりあいて御覧あるべく候。